

平成24年度情報文化学科卒業論文

現代日本家族の現状とその孤独的問題
－高齢者の孤独をめぐって

圓岡偉男ゼミ

C09007 安西 航

| | |
|--------------------|----|
| 目次 | 1 |
| はじめに | 2 |
| 第一章 | |
| 高齢者の現状 | |
| 1-1 高齢者の現実 | 3 |
| 1-2 少子化の現実 | 3 |
| 第二章 | |
| 高齢者の孤独の現状 | |
| 2-1 高齢者の孤独世帯 | 7 |
| 2-2 家庭内の孤独 | 9 |
| 2-3 無縁社会と呼ばれる日本 | 10 |
| 第三章 | |
| 高齢者の社会的孤独 | |
| 3-1 高齢者のコミュニケーション | 11 |
| 3-2 高齢者の貧困による孤独 | 12 |
| 3-3 社会問題としての高齢者の孤独 | 13 |
| 結語 | 14 |
| 参考文献 | 15 |
| 参考ホームページ | 15 |

はじめに

私の住んでいる地域は海が近く山に囲まれており、私と同年代の人達はほとんどが、高校を卒業後就職し、会社の寮生活又は、一人暮らしを始め地元から離れていき、先輩や後輩、同級生も地元から居なくなっている。そのためか、朝目が覚め家から出ると必ず近所のおばあちゃんが猫に餌をあげているのを見る。そしてゴミ捨て場にも同じ地区のおばあちゃんがゴミを捨てに来るのもよく見かけ、休日に家に居ると近所のおばあちゃんが散歩のついでに私の家により祖父母や、母と世間話をしている。昼間になると近所のおじいちゃんも私の家の庭が散歩道なのか一日一回以上は必ず通過していく。ほぼ毎日祖父母以外の高齢者の方達を 3 人以上見かける日々を過ごし、高齢者が多いいまに今の日本を浮き彫りにした様な地域だと感じ、高齢者に対し問題が散見された。

そして、近年テレビや新聞などのメディアでも日本の高齢化、高齢社会が取り上げられるようになり、年金の問題や高齢者の孤独死など高齢者化が進むにつれて様々な問題が顕著になり、特に高齢者の孤独死についての報道を見た時自分の住んでいる地域では、高齢者の夫婦のみで住んでいる核家族、又は、高齢者の一人暮らしを多数見る事になった。このような背景のうえ、高齢者の現状や、社会問題としての高齢者の孤独について注目し考察を行う

第一章 高齢社会の現状

1-1 高齢者の現実

高齢者の人口の増加により日本では高齢化が進み、国連の定義によると、65 歳以上の方は高齢者とされ、人口の 7 パーセントが、高齢者が占める場合高齢化社会とされ、14 パーセントになると高齢社会と定義される。平成 23 年度内閣府発行の「平成 24 年度版 高齢社会白書」によると、65 歳以上の高齢者の人口は、昭和 25 年(1950 年)で総人口の 5 パーセントに満たなかったが、昭和 45 年(1970 年)に 7 パーセントを超え高齢化社会へととなった。さらに高齢化が進み平成 6 年(1994 年)には人口の 14 パーセントが、高齢者が占め高齢社会へととなった。そして、平成 22 年(2010 年)には 23.1 パーセントとなり 5 人に一人が高齢者、10 人に一人が 75 歳以上と発表されており、平成 23 年(2011 年)には高齢者人口は 2980 万人で、総人口に占める割合は 23.3%、男性は 1273 万人男性人口の 20.5%、女性の高齢者は 1707 万人女性人口の 26.0%と女性は 4 人に 1 人が 65 歳以上である。

平均寿命は、平成 23 年度内閣府発行の「平成 24 年度版 高齢社会白書」によると、平成 22 (2010) 年現在、男性 79.64 歳、女性 86.39 歳であり図 1-2 を見て頂くと、将来的にも平均寿命が上がると予測されている。図 1-4 を見て頂くと日本の高齢化の進展は、その速さといい、他の欧米先進国と比べても高齢化の進行は大変早いものであり今現在、世界で一番高齢者が総人口に対する割合が高い国である。そしてこのような高齢化の進展の下で、老年人口そのものがどのように変動するかということを見ると、図 1-1 を見ると将来日本は 2060 年には 2.5 人に 1 人が 65 歳以上、4 人に 1 人が 75 歳以上になると予想されており、今よりも高齢者化が進んでいる未来が予測されている。

1-2 少子化の現実

そもそもの高齢化の要因と思われるのが出生率の低下であると思われ、図 1-3 は、1950 年前後が第一次ベビーブームのピークでありこの頃の出生数は 270 万人台であった。この頃の合計出生率(一人の女性が一生の間に子供を産む比率)は 4 を超えていた。その後出生数、出生率共に低下を続け 1960 年代初頭に出生数は 160 万人程度に減少したが、第二次ベビーブームに向かって再び出生数は増加し、1973 年にはピークの 209 万人を記録した。

その後、出生数は減少し 1997 年には 1.39 に、1998 年には 1.22 万人となった。日本の人口を現状で定常状態に維持するには、2.08 の出生率が必要である。したがって 1.4 を下回る出生率では、日本の人口は将来に向けて減少を続けざるをえなくなり、若い世代が減るため、高齢化になっていくことが明白である。

図 1 - 1 高齢化の推移と将来推計

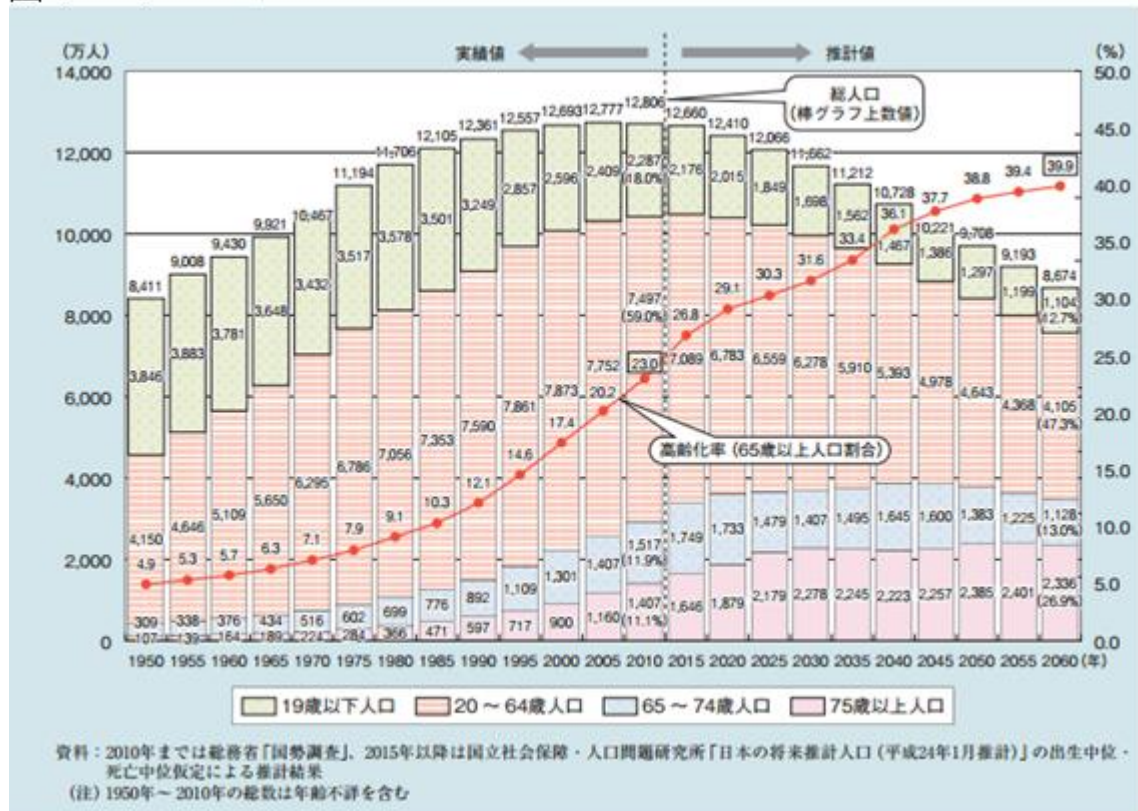


図 1 - 2 平均寿命の推移と将来推計

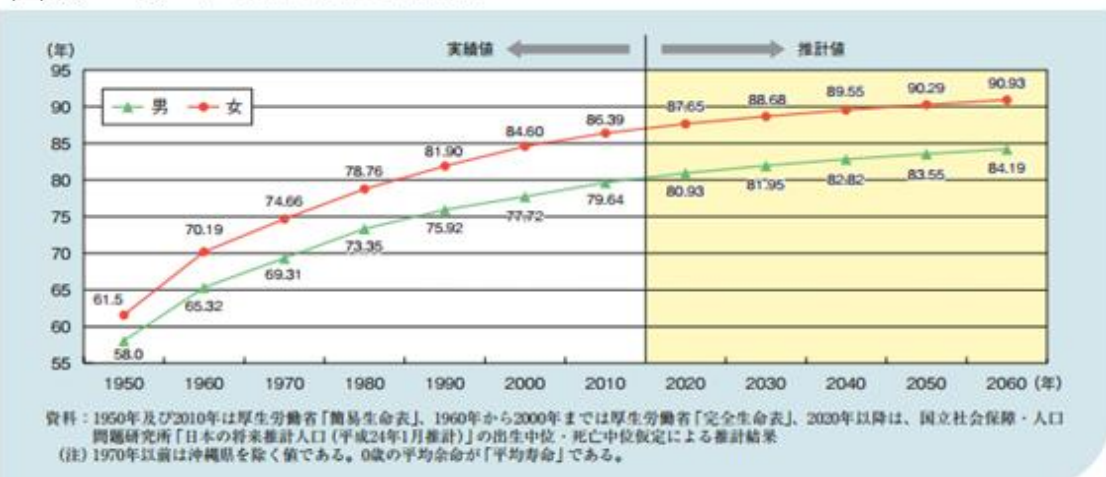


図 1 - 3 出生数及び合計特殊出生率の年次推移

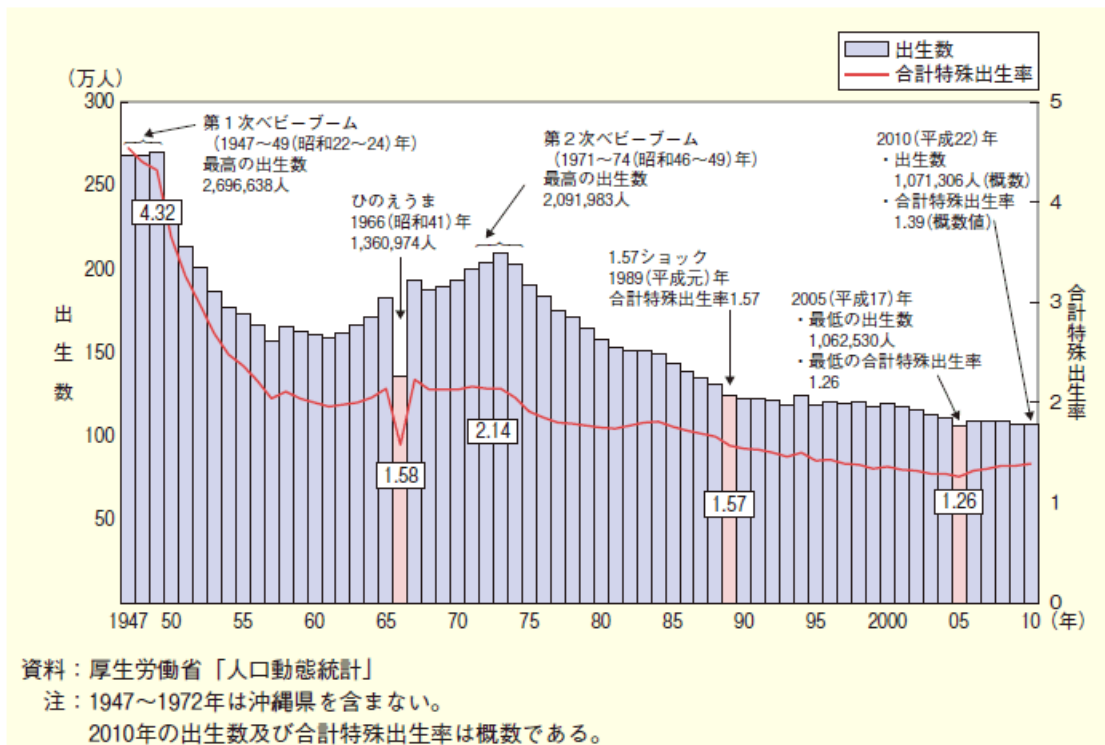
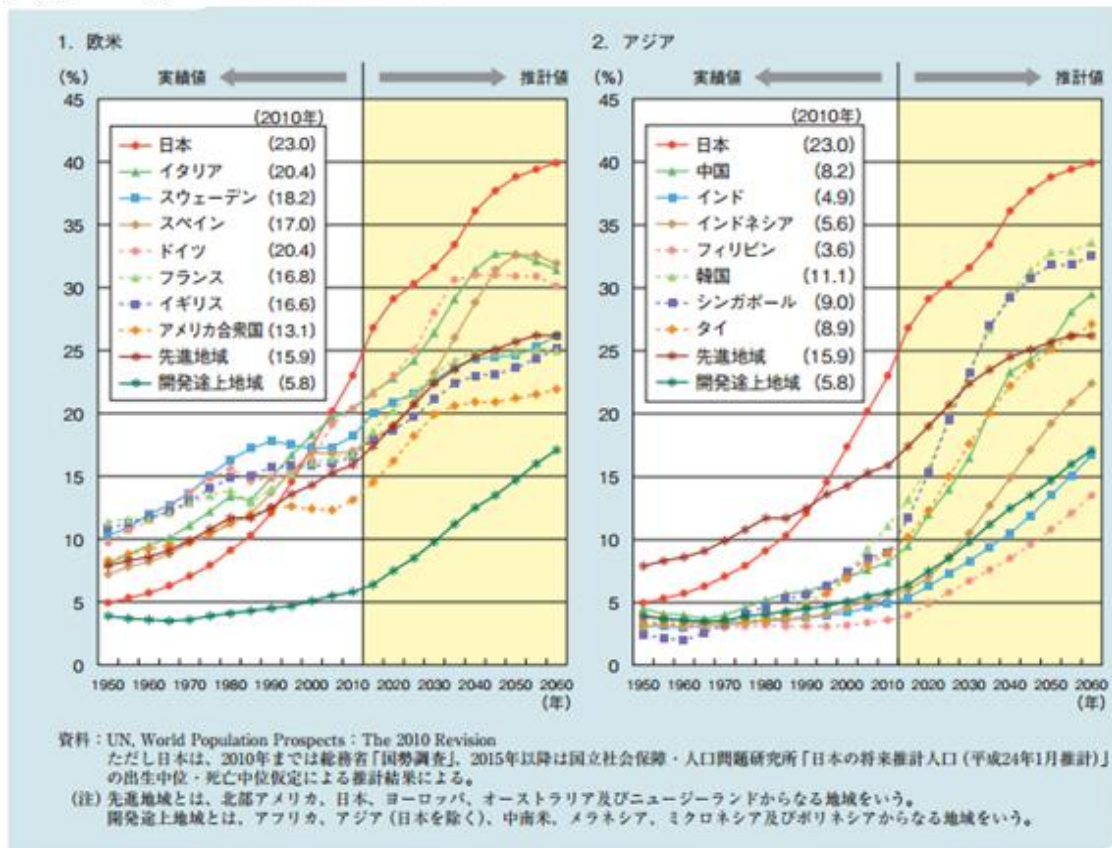


図 1 - 4 世界の高齢化率の推移



現代の日本にとって、高齢の人口に対する比率の上昇や、少子化は目を背ける事の出来ない問題あり深刻な状況であると言える。日本の人口の減少、人口の高齢化で将来日本は2060年には2.5人に1人が65歳以上、4人に1人が75歳高齢者とされると考えられており、この数値は、世界でも人口の高齢化の速さは大変早いものであり、今現在日本は、世界で一番高齢者人口の割合が多い国である。若者の減少は高齢者の一人暮らし、孤独に陥る要因の一つに考えられるため高齢者の孤独について付きまとう問題である。

第2章 高齢者の孤独の現状

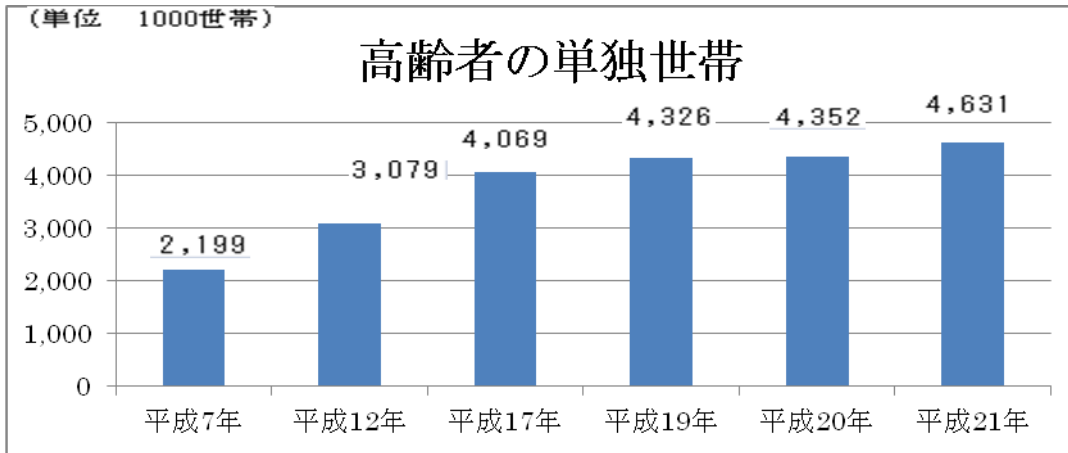
2-1 高齢者の孤独世帯

厚生労働省大臣官房統計情報部社会統計課国民生活基礎調査室「国民生活基礎調査」65歳以上の者のいる世帯数から図2-1を制作した。

図2-1を見ると平成7年から平成21年までに高齢者の単独世帯数が、14年間で約2倍に膨れ上がっている事がわかる、単独世帯の高齢者の男女比では、圧倒的に女性の方が多いため平成23年内閣府発行の『平成23年度版高齢者白書』一人暮らしの高齢者の動向のグラフでわかった高齢者の動向のグラフ(図2-2)を引用した。しかし、高齢者の男女の比率、単身世帯の男女の比率から見ても女性の方が多いため、『セカンドライフを考えたらこの一冊を』の著者、岡田良則によると「現役時代サラリーマンとして仕事を「生きがい」として働き、定年により仕事を失うと、急激な生活パターンの変化から孤独感に襲われ、その後の「生きがい」を見失うことになり、地域社会との繋がりもおろそかにしてきたため主婦のように地域社会に溶け込むのも難しい」と、指摘しており、『高齢者は暮らしていけない』の著者、結城康博によると「独立行政法人都市再生機構は、全国で約七十七万戸の住宅数を有しているがその住宅者の孤独死数が、年々、増え続けている。そのうち、65歳以上が約七割占めている。孤独死で無くなるのは男性が多く全体の七割を占める」と、両著者共に男性の高齢者について述べている。つまり男性の高齢者の方が人近所付きあいや、人間関係、人との繋がりが弱く、女性は男性に比べ人間関係や、地域社会との関係が結びやすいのである。こういった孤独に陥りやすい高齢者の場合、自分からあまり他人と関係を気づこうとせず、食生活や、環境、安否確認が誰かの手が必要な場合でも、本人が望まなければ介入せず、その結果孤独死という結果にいたるのである。

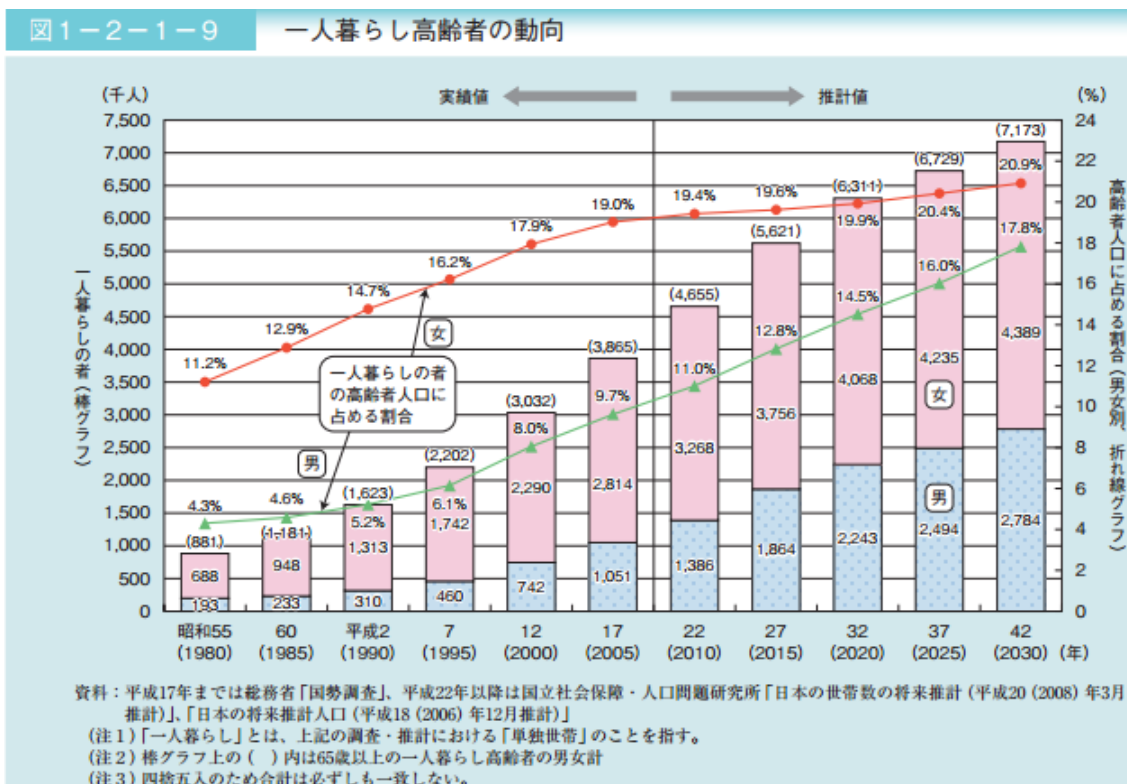
家族と同居している高齢者より、一人暮らしをしている高齢者の方が他人と話す頻度が低く、多くの高齢者が地域との関わりを必要と思っている、また年齢が上がるにつれ地域との関わりも増えてくるが、地域との繋がりを感じる高齢者は少ない。このような高齢者が増え65歳以上の高齢者で、誰にもみとられずに死んでいく人は年間1万5000人を超える。また、生前に「セルフ・ネグレクト」(自己放任)状態にあったと考えられる人が約8割含まれている。また低所得と住環境の貧困が孤立・孤独化に繋がるとし、その傾向は、社会的に最も弱い層の一つである高齢者世帯、一人暮らし高齢者世帯、社会階層の下層に属する人間は、持ち家の可能性は低く、生涯狭い民営アパートに居住し、「セルフ・ネグレクト」のような状態に陥り生涯独身となり、行政当局からもその存在を把握されず、孤立・孤独化を深める傾向が強めている。

図 2-1



(厚生労働省大臣官房統計情報部社会統計課国民生活基礎調査室「国民生活基礎調査」から制作)

図 2-2



2-2 家庭内の孤独

歳をとれば誰もが老いていく、高齢者の一人暮らしが増えているが、自分の子供、孫世代と同居している高齢者もいる。一見孤独とは思われないと思うが同居している家族と日常会やコミュニケーションをあまり取らず、家族からも相手にされない高齢者もいる。

高齢者研究者、河合千恵子の、『老いた親が「ひとりに」になったとき』によると、ひとり遺された時に3つのタイプに親が分かると指摘する。

タイプ1

「頑固・わがままな親」

このタイプの親は、一緒に暮らし始めると同居者が振り回される可能性が高くなります。人の提案を受け入れなかったり、新しいものに拒否反応を示す傾向があり、自分が今までに蓄積してきた経験や知識を否定されたように感じるためです。

なんでも自分中心に進んでいるうちはご機嫌ですが、自分がないがしろにされたと感じるとわがままぶりを発揮します。コミュニケーションの仕方に工夫と忍耐が必要を要求され、こちらが良かれと提案したことも否定されるため、家族も関わりを避けるようになります。

タイプ2

「グチ・不満の多い親」

自分の思いどおりになることが減り、新しい経験をすることが無くなったためか、自分が輝いていた頃を基準に物事を判断します。そのため、当時の自分と現在とを比べ「あの頃はよかった」となるのです。このような親と同居し、どこかに出かけた場合「ホントは〇〇に行きたかった」「〇〇が食べたかった」など後になってから文句ばかり言い、何かしようとする積極性や向上心もないため同居している家族も気が滅入るだけであり、グチや文句ばかり言う親と同居している家族も次第にうろさがり、家庭内で親が孤独になる、ますますグチが増えると言う悪循環がうまれます、こういった親と向き合うのは精神的にも疲れ難いものである。

タイプ3

「自立心の強い親」

自立心の強い親は、子供には迷惑をかけたくないという思いが強いため、衰えや老を子供に隠しがちなため、本音や本当の健康状態が見えにくく、何か手伝って欲しいことを言い出せず、こういった親がいきなり「老人ホームに行きたい」と言う場合がある。

自立心が強いと自ら家族との繋がりを減らし家族へ頼らず自分でどうにかしようとしてしまうのです。

同居している親や、祖父母が家庭内で孤独と感じていたのなら、上記に記した事が当てはまる可能性が高い。見放すのは簡単だが、どう接していくかが重要な点であり、相手の

事を理解し、又、忍耐強く歩み寄る事が孤独と感じさせないことであるとする。

そしてこれから人口の高齢化が更に進むにつれ、高齢者との同居は可能性はゼロとは言えない、そして同居以外にも私生活で高齢者と接していく事は増えるはずだ。なので、上記に記した以外のタイプが現れるかもしれない。

2-3 無縁社会と呼ばれる日本

無縁とは、一人暮らしの高齢者は地縁、血縁、などの縁が薄れてしまい、その結果久しぶりに訪問した親族に、遺体で発見されたりする。原因としてあげられるのが、お金や財産の無い親に子供が寄り付かなくなり疎遠になってしまったり、子供に迷惑をかけたくないという親が多くなり、その結果助けを求める家族や友人でさえおらず死んでしまう高齢者が増えた。

また、50代で会社を解雇され頼る友人や家族もおらず、路上生活を余儀なくされそのまま所在不明となるケースもある。このような高齢者や周りに繋がりが無い人達も死んだ場合、遺族が遺体を引き取るのだが受け取りを拒否する事などの問題もある。『無縁社会 “三万二千人の衝撃”』をまとめたNHK「無縁社会プロジェクト」取材班によると、「こういった無縁死を遂げるのは3万2千人」にものぼると指摘している。

このような無縁となってしまう現代の日本の背景としては、家族形態の変化が要因だと考えられる、かつては、三世代一緒に暮らす三世代同居が当たり前だった時代がから、核家族へ、そして今では一人暮らしの単身化の時代へと移り変わってきた。さらに、未婚化、少子化が進んだ事で結婚していない人、結婚しても子供がいない人が増え親族との無縁状態を築いてしまうのである。

『23年度版 高齢社会白書』によると、誰にも看取られずその後、相当期間放置されるような「孤立死（孤独死）」が、東京 23区内における一人暮らしで 65歳以上の人の自宅での死亡者数は、図2-3のように、平成 19（2007）年 2361人、平成 20（2008）年 2211人、平成 21（2009）年 2194人と3年連続で 2,000人を超えている。また、図に2-4によると（独）都市再生機構が運営管理する賃貸住宅約 76万戸において、単身の居住者が誰にも看取られることなく賃貸住宅内で死亡したケース（自殺や他殺を除く）は、平成 21（2009）年度に 665件、65歳以上に限ると 472件となり、平成 12（2000）年度に比べ全体で約 3倍、65歳以上で約 4倍に増加している。これらの死亡者数がすべて孤立死であるわけではないが、いわゆる孤立死の多くがこの人数に含まれると考えられることから、孤立死の数もおそらく、同様に高い水準にあるものと推測される、「社会的孤立」であるが、各地域では、高齢者の社会的孤立に対する対策がこれからの急務になるだろう。

図2-3

東京23区内で自宅で死亡した65歳以上一人暮らしの者

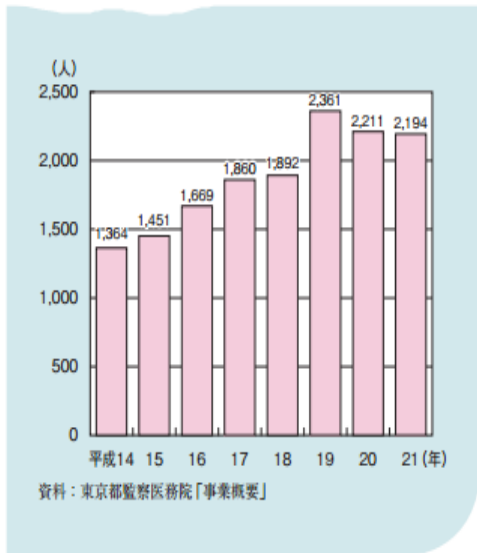
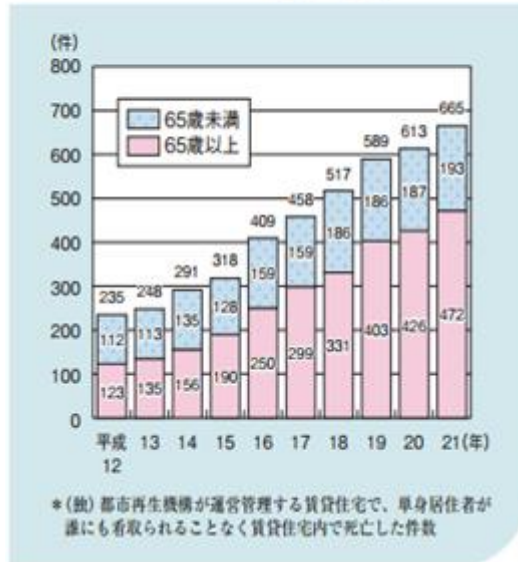


図2-4

(独)都市再生機構における「孤立死*」の発生状況



第三章 高齢者の社会的孤独

3-1 高齢者のコミュニケーション

高齢者の社会的孤立がもたらす問題点 生きがいの低下誰とも会話をしない、近所づきあいをしない、困ったときに頼る人がいないといった、社会から孤立した状況が長く続くと、生きがいを喪失したり、生活に不安を感じることもつながる。

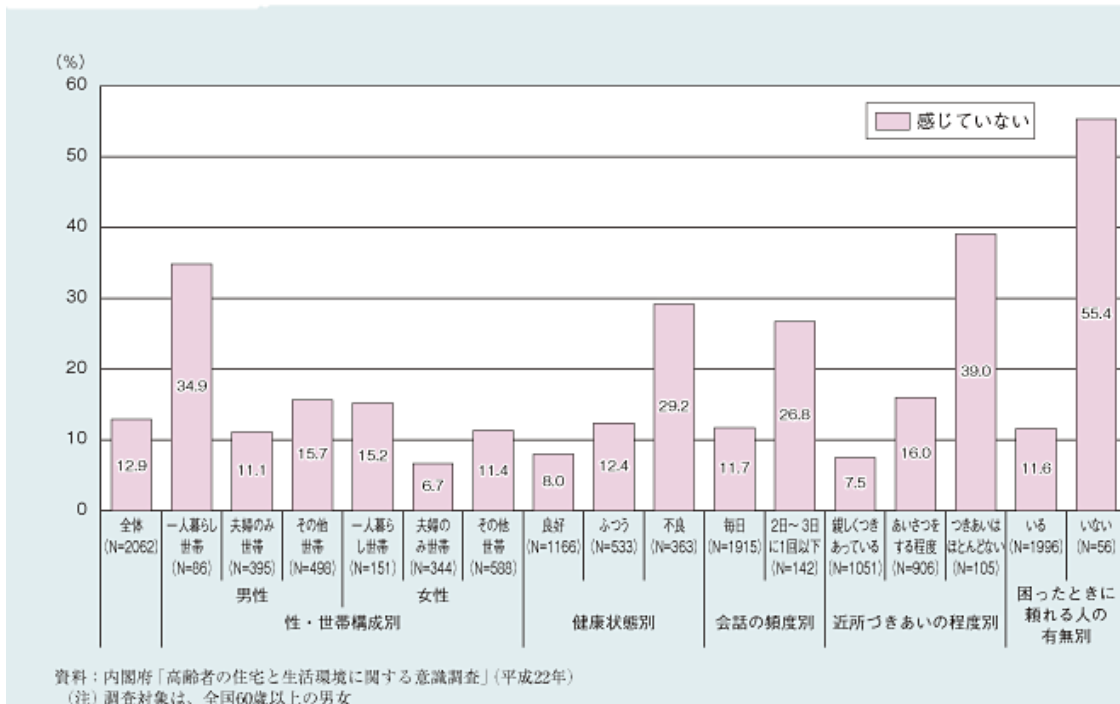
『平成23年度版 高齢白書』意識調査の結果から「生きがいの有無」を見ると、全体では「生きがいを感じていない」人の割合は12.9%であるが、性・世帯構成別にみると、一人暮らしの男性で34.9%となっている。

また、会話の頻度別に見ると、「生きがいを感じていない」人の割合は、毎日会話をしている人では11.7%であるが、会話が「2日～3日に1回以下」の人では26.8%である。近所づきあいの程度別に見ると、「つきあいはほとんどない」人で39.0%の人が「生きがいを感じていない」と回答している。

「困ったときに頼れる人」の有無別では、「困ったときに頼れる人」がいない人のうち、過半数となる55.4%の人が「生きがいを感じていない」と回答している。

この結果から高齢者の社会的孤独は、高齢者になると約半数の高齢者が感じる事なのである。

図3-1 生きがいを感じていない人の割合

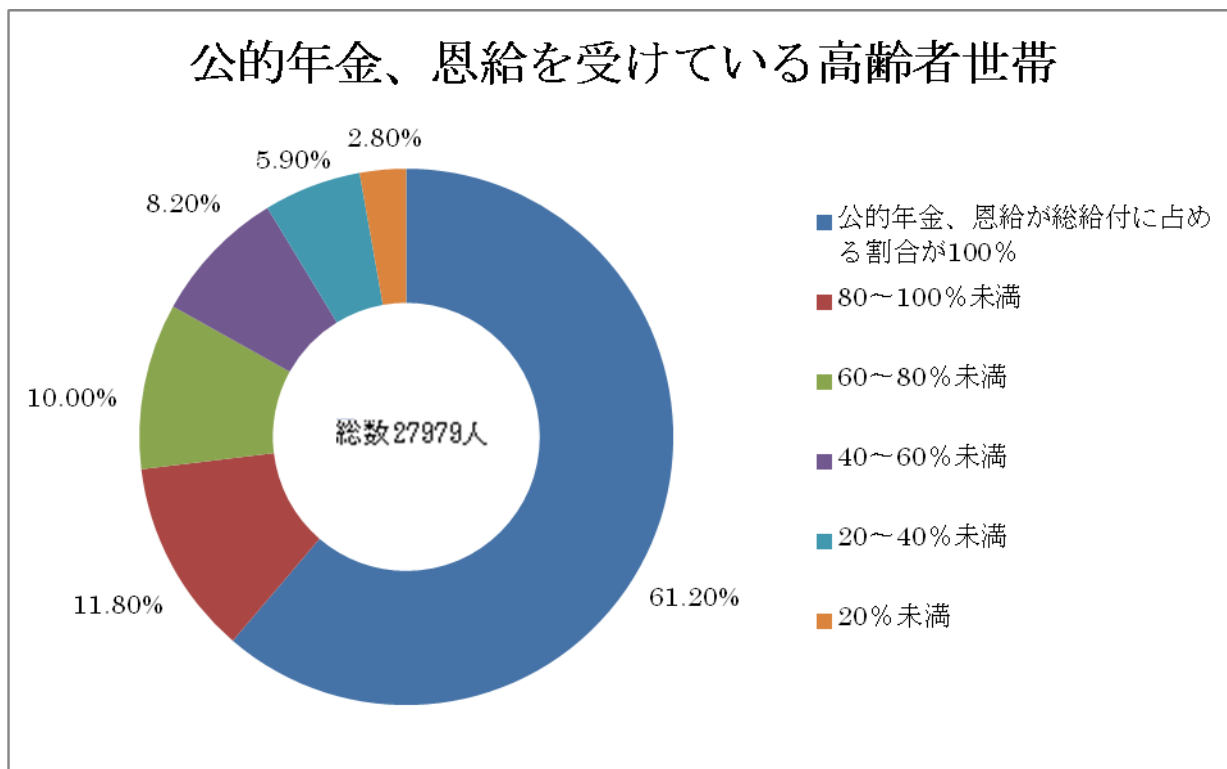


3-2 高齢者の貧困による孤独

『高齢者は暮らしていけない』の著者、結城康博によると、男性と女性の高齢者には所得格差があり、女性の高齢者の場合年金給付額も低く男性の老後に比べ厳しい現実が明らかになっているとおっしゃっている。

高齢者の所得として最も多いのが公的年金や、恩給であると考えられ、厚生労働省の平成23年の年金・恩給を受給している高齢者世帯における公的年金・恩給の総所得に占める割合別世帯数の構成割合を図3-2にまとめた。この図を見ると高齢者半分以上が、公的年金・恩給しか所得がないという事がわかり、高齢者の所得の格差が生じていると思われる。公的年金しかもらえない高齢者や財産のない高齢者は、自分の子供たちから寄り付かれなく場合がありうる。

図3-2



3-3 社会問題としての高齢者の孤独

高齢者の社会問題は様々あるが、日本の家族形態の変化で、一人暮らしの増加、特に高齢者の一人暮らしの増加が見出された。一人暮らししている高齢者は、近年、誰からも看取られることなく、相当期間放置された孤立死で発見される高齢者が増えた。孤立死でなくなった遺体はたいていの場合、地方自治体の役所で火葬され、遺骨を親族が引き取るのだが、引取りを拒否するという問題が発生している。引取り拒否される背景として、十年以上関わりの無い遠縁、又は、結婚をしていない親族、結婚しているが子どもがいない親族は、甥や姪が引き取り手になる可能性もあり、普段から交流があればよいが、冠婚葬祭などで顔を合わせる程度で、いきなり引き取ってくれという連絡がきたら考えてしまうであろう。こういった引き取り手の無い遺骨は、『無縁社会 “三万二千人の衝撃”』をまとめたNHK「無縁社会プロジェクト」取材班によると、市営の無縁墓地に行くのだが、東京・足立区役所に預けられた引取り手の無い遺骨の場合は、富山県高岡市にある高岡法大寺へと送られる。なぜ市営の無縁墓地に行かず、高岡法大寺送られるかと言うと、市営の無縁墓地もいっぱい置き場が無い状態であり、家族に引取られなかった遺骨は東京や、神奈川、千葉、埼玉都市部から多く送られて来ると述べている。このような、家族からの引取り手の無い遺骨は最悪の場合お寺に供養も去れず、そのまま処分されてしまうこともあり、現代の高齢者の孤独は亡くなくてもなお無縁のまま終わる場合もある。

結語

本稿では高齢者の孤独、日本の人口の高齢化や少子化といった、日本の高齢社会で起こりうる問題を分析。まず始めに第一章では、日本の人口の高齢化になったと思われる要因、高齢者の現状について述べ、第二章では高齢者の孤独の現状、家庭内の孤独、無縁社会について述べ、第三章で、高齢者のコミュニケーションについて、高齢者の社会的孤独、社会問題としての高齢者の孤独について述べた。これらの章について簡単に述べる。

第一章では、国連が定める高齢化の定義によると、総人口に対する高齢者人口の割合が7%になった場合「高齢化社会」、14%になった場合「高齢社会」と定義されている。日本の人口の「高齢化社会」が始まったのは、昭和45年1970年高齢者の比率が7%を超えた、そして高齢化社会、平成6年1994年にその売価水準の14%を超え高齢社会となった、人口の高齢化の要因は出生率の低下により、高齢者の人口が総人口に対して占める割合が、上昇したからである。この高齢化のスピードは、他の欧米先進国と比べても大変早く、平成23年には世界で一番の高齢化率23.3%を記録した事は特徴的であった。

第二章では、高齢社会になった日本では、定年後仕事を生きがいにしていたサラリーマンたちが、家庭に入り老後を過ごす人が増え仕事を生きがいにした為、近所づきあいもあまり無く、地域社会に溶け込めずに、生きがいを無くしている高齢者がいる。そしてそこに見えてくるのが無縁社会である、無縁社会とは、一人暮らしの高齢者は地縁、血縁、などの縁が薄れてしまい、その結果久しぶりに訪問した親族に、遺体で発見されたりする。原因としてあげられるのが、お金や財産の無い親に子供が寄り付かなくなり疎遠になってしまったり、子供に迷惑をかけたくないという親が多くなり、その結果助けを求める家族や友人でさえおらず死んでしまう高齢者が増えた。今現在日本は、このような無縁社会と言われる社会に直面しているといえる。

第三章 高齢者の社会的孤立がもたらす問題点として、生きがいの低下、誰とも会話をしない、近所づきあいをしない、困ったときに頼る人がいないといった、社会から孤立した状況が長く続くと、生きがいを喪失したり、生活に不安を感じることもつながっており、独居老人の孤立死が社会問題としてあがる。一人暮らしの高齢者が誰からも看取られることなく、相当期間放置された孤立死で発見される高齢者が増えた。そしてその遺体を、地方自治体で火葬し、親族へと引き渡されるのだが、それを拒否する事がおきている。引き取り拒否される背景として、十年以上関わりの無い遠縁、又は、結婚をしていない親族、結婚しているが子どもがいない親族は、甥や姪が引き取り手になる可能性もあり、普段から交流があればよいが、冠婚葬祭などで顔を合わせる程度で、いきなり引き取ってくれという連絡がきたら考えてしまうであろう。このような遺骨はお寺で供養され、最悪の場合処分されるのである。

このような、高齢者の社会問題はこれからの日本に出された大きな課題である。

参考文献

結城康博, 『高齢者暮らしていけない』, 岩波書店, 2010年

河合千恵子, 『おいた親が「ひとり」になったとき』, 株式会社河出書房新社, 2005年

岡田良則, 『セカンドライフを考えたら』, 株式会社自由国民社, 2006年

野口悠紀雄, 『高齢化の日米比転』, 日本経済新聞社, 1995年

著者 NHK「無縁社会プロジェクト」取材班, 『無縁社会 “三万二千人の衝撃”』, 株式会社文藝歌集, 2010年

参考ホームページ

共生社会生活高齢社会対策

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/23pdf_index.html

総務省統計局政策統官

<http://www.stat.go.jp/index.htm>